

都市河川における魅力的なふれあい推進事業に関する事例研究

福岡大学工学部 学生員○梅崎健史 福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一
 福岡大学工学部 正会員 山崎惟義 福岡大学大学院 学生員 高辻伸彰

1. はじめに

その昔、川では子供達が泳いだり、魚を採ったりする光景は当たり前のように見られていた。このため、流域に住む人々は日頃から川に注意を払い、川を汚す人もいなかった。また、川で起こる微妙な変化にも敏感であった。しかし、昭和 30 年代を境に、全国各地で都市化が進み、川はコンクリートに覆われた構造物へと変化した。その結果、人々は川に近づけなくなり、川に対する興味を失っていった。そこで、我々土木技術者は流域住民の方々に川に再び興味を持っていただくきっかけをつくり、川の魅力を伝え、川に対する意識を高めて行く必要があると考えられる。本研究では、都市河川で行われている地域活動で得たアンケート結果をもとに、川を活かしたまちづくり事業をより魅力的にして行くためには何が必要であるかを考えることにした。

2. 対象イベントの概要

1) ふれあい室見川 (写真 1)

早良区で行われているプロジェクト Muromi の一環で、市民と行政の協働による企画である。今年で 5 年目を迎えるイベントで、「むろみんピック」では直接川にふれあうイベントを行い、「むろみんフェア」では、市民手づくりの 19 個のイベントを開催した。

2) 那珂川フェスタ (写真 2)

那珂川の博多区美野島地区で行われた市民と行政の協働によるイベントである。今年は新たにカヌー体験を取り入れた。昨年も人気があったミニ水族館をはじめ、“自然”にふれあえるイベントを 10 個開催した。

3) リバーピクニック (写真 3)

博多の水辺にぎわいのまちづくり検討会(地域・NPO・行政)が行った博多川・那珂川を活かしたイベントである。イベント内容は午前中に博多川で魚釣り大会とミニ水族館行っ、午後からは那珂川河口の清流公園付近でカヌー体験を行った。

4) 室見川灯明まつり (写真 4)

有田公民館の方々により室見川の秋の風物詩として定着した参加型の地域イベントである。第 1 回に四千個であった灯明は徐々に数が増え、第 6 回には約二万二千個になった。



写真 1 ふれあい室見川

写真 2 那珂川フェスタ

写真 3 リバーピクニック

写真 4 室見川灯明まつり

3. 研究手法

すべて対面による会話を通じてイベントに参加された来場者の方にアンケート調査を行った。アンケート内容は来場者の属性やまちづくりイベントに対する意識調査をした。

4. 結果及び考察

アンケート回収部数はふれあい室見川では 105 部、那珂川フェスタでは 54 部、リバーピクニックでは 50 部、室見川灯明まつりでは 97 部であった。それらのアンケート結果からすべてのイベントで、イベント活動自体は楽しんでいただいていることがわかった。しかし、我々土木技術者は川を活かしたイベントをただ

楽しんでもらうためだけではいけない、川の魅力を伝え、興味を持っていただくことで、再び川に関心を持っていただくきっかけをつくる必要があると考えられる。

4.1 川に関心が持てるイベント

1) 昨年の反省を活かし、今年のふれあい室見川 2006 は参加者に川への関心を持っていただくために室見川水族館というイベントを催した。昨年のアンケート結果より「よさこい踊り」、「和太鼓」が人気だった。しかし、今年は図1のアンケート結果より、「和太鼓」を上回り室見川水族館が一番人気のイベントとなった。そして、幅広い年代の方々に川にはたくさんの魚がいることを知っていただいて、川に興味を持ってもらった。

2) 那珂川フェスタでよかったものとして尋ねたところ、2006（昨年も参加された方）はカヌー体験が全体の約5%、2006（昨年は参加されてない方）は全体の28%と大幅に異なった。今年初めてカヌー体験を導入したように、流域住民の方々が興味を持つようなイベントを開催していく必要があると考えられる。また、カヌーに乗ることにより、普段と違った川の現状（川の水深、川の濁度、川の生物など）を知ってもらえた。

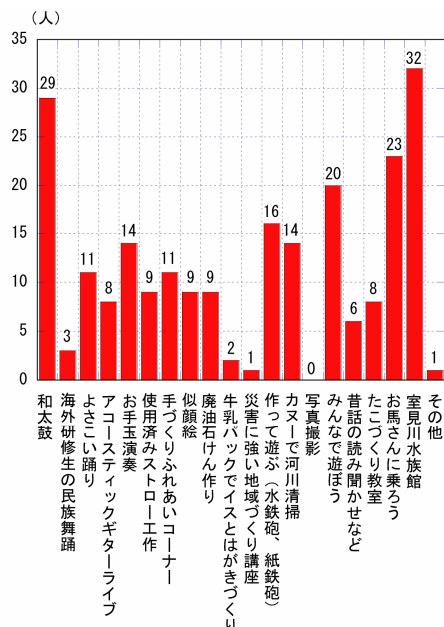


図1 ふれあい室見川 (N=105)

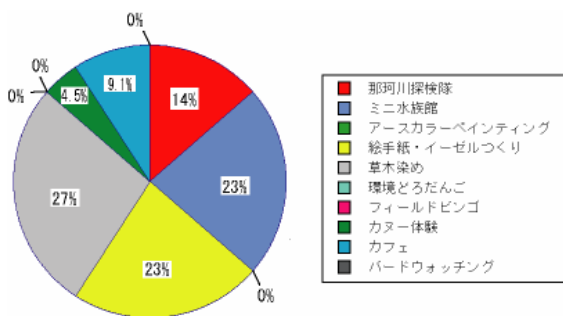


図2 昨年も参加された方 (N=12)

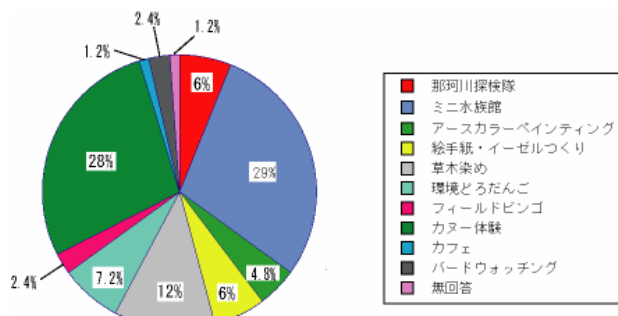


図3 昨年は参加されてない方 (N=42)

4.2 イベントの広報活動

リバーピクニックにおいて、カヌー体験の参加者が少なかったのはイベントを開催するための準備期間が短かったのではないかと考えられる。これはアンケート結果からよく分かるように、事前に広報活動が上手くできなかったため、参加者が少なかった。表1からふれあい室見川、那珂川フェスタは事前にイベントの情報を知らせたためメディアが高い割合を示した。これは何回も企画会議を開き十分に準備を行ったためであると考えられる。また、室見川灯明まつりは以前からイベントがあるのを知っていたためイベントを継続することが重要であるといえる。

5. 結論

実際に魚を見て触ったり、カヌーに乗ったりすることで、参加者に川に興味を持ってもらうことが出来たと考えられる。また、参加者は室見川水族館のような川にふれ合えるイベントに期待していることがアンケートから明らかになった。今後、川を活かしたまちづくり事業を行う際は、事前に広報活動を行うことが重要であることも明らかになった。

参考文献 1) 高辻伸彰: 川を活かしたまちづくり事業の比較分析に関する研究, 福岡大学工学部卒業論文, 2005.

2) さわら魅力づくり推進委員会: ふれあい室見川来場者アンケート結果, 2006. 3) 博多区役所総務部企画課: 那珂川フェスタ来場者アンケート結果, 2006.

表1 イベントをどのようにして知ったか

	どのようにして知ったか	
	メディア	人から
ふれあい室見川	68	25
室見川灯明まつり	38	23
那珂川フェスタ	48	26
リバーピクニック	30	50

(%)